

二部会展を見る (1)

先づ会の立場から考へて

木村莊八

今年の第二部会展情勢上止むに止まれず旗上げはしたものの、内質は旧帝展洋画部そのままのものであるから、そこに独立自営の一会としての旗幟や立場が立たないのは、かへつてこれを求める方が無理だ。いづれこの会がこのまま自営独立を続けるものとすれば、従来はこのメンバーには上に帝展当局の統制力があつたからいいが、これから先は、会そのものが、融けて有機体とならなければ、自営成りにくいので、そこへ漕ぎ付ける道中にいろんな曲折があるだらう。実は『第二部会』の真相はいづれこの先き適当な曲折を経過した上で初めてはつきりとその旗幟の立つものであらう。今年のこの会は何か将来の一会・一団体を招致する前奏曲、その一つのデモンストレーションと見るべきだ。

果して現在の賑やかな前奏曲の中から、いづれどんな有力且永続的な『二部会』が生れるものだらうか。差当つて批評は、そのテーマを聴き分けるのが仕事のやうに思はれる。

そんなことを考へながら――

今年の旗上展で最も問題にならうし、また最も面白い作品と思つたものは、第十一室の『海の女』(猪熊弦一郎)であつたがこれは作者その人からいへば、前よりも筆が立つて画面の芸術的能弁を増してゐるし、問題作と

していへば、よく時代相に即いた仕事で、モティフ画図が生きてゐて面白い。それといふのが、元々、この作者の画生活なり気合ひなりが張つてゐるので、多少画面の部分的欠点はさもあればあれ、仕事全体に明朗活発な弾力性があるから、いいのである。

これにほんして反之、この猪熊弦一郎以前に帝展の二部を背負つたことのある旧選手の中村研一の『瀬戸内海』(第十室)は、ロングヒットを放たうとする構へは旧と同じでも、選手生活にかなりの疲れがあると見えて、今年は画面の裏に息切れがしてゐる。具体的にいへば、得意の黒の調子が散つて統合がないから、この当りはスムーズでない。

――第二部会の四番は中村君あたりから代つて当分若手の猪熊君あたりが打つたらう。

先づ今年の功名頭からあげて見る訳だが――第一室に新人を見かけるのは、この会のために幸先よくもあるし、観者として愉快なことである。第一室のつき当りの壁に有る脇田和『父子』、及びピクニックを名指すのであるが、これも部分的にいへば欠点があつても、画面の上のことで、内部ではなく、仕事の筋は中々しつかりした、近頃の良デビューい初見参だ。この先この辺の人がこの会で働くやうになると面白いと思つてゐる。

それと、同じ室の佐藤敬、この人も先年のデビューの良かった人であつたが、今年は仕事振りを変へて、いはばさぐりを入れた少々不安の形は有つても、何れは何か面白いものを見せてくれる新選手だらう。画面に神経の有るのがさう心丈夫に思はせる。『海辺裸婦』そのものは上作ではないが。

第一室の右の壁の作品には概してその神経が無いやうである。目録第四、第五(岩崎修吉)、第六(森田元子)等は素直に受取れる。

『報知新聞』 昭和十年十月二十四日

二部会展を見る (2) ファイル(25)

画面の神経といふこと

木村莊八

前回に画面の「神経」といつたものの説明をすることはむづかしいことである。これは言わず語らずの間にカンのやうなもので肯^{がんじ}えてもらふ他には——殊に新聞評のやうな紙面の少い場合は——方策がないやうであるが、二部会の第二室はその「神経」に乏しい室である。僅かに学生作の《シュミーズの女》(山中清一郎)、《秋景静物》(上田巳之助)等によつてやや慰められるのみ。

しかし「神経のない画面」を一概にアダダミズムのためばかりと限らないのは、第四室の寺内萬治郎(第七一、七二)には何か有る。あるひは第九室の田邊至(第一六三、一六四)には官學派それ自体としての一つの境地があるし、同じ室の金山平三(第一六五、一六六)は画面に機略と練達の有る美しいものである。

つまり作家の内部から絵具の乗つて画面に出て来る、この手続きの上に、イズムの何たるを問はず、「神経」はその有無・生死を、未然に運命づけるものであらうか。第三室の第五三番(《裸婦》岡田三郎助)は感じの遠々しいものではあつても、美しいものだし、また第四八番(《画室の内》和田三造)は極めて手薄い画面の構成なるに拘はらず、芸術的方面は肯^{うべな}ふこと出来るものだ。硯の良否は鋒^{ほうほう}鋌有無を以て決するが、それと同じやうなも

のだらう。

画技あるひは画面（従つてその主義）よりはむしろその「人」にあるものといつてもよいであらう。

第三室は大体元老室であるが、この中の元老ならざる第五九番（《酸漿》池辺鈞）はいつもながらうれいしものだ。元老作の中では第四九番（《神戸港の朝陽》藤島武二）、第五〇番（《赤城の新緑》満谷国四郎）がよく、殊に《神戸港の朝陽》は小点ながら場幅でのゆつたりした画面振りを示して、これは当代洋画一つのレベルとなるものだ。

第四室では安宅安五郎に「神経」があつてよい。画面にはかなりの欠陥をおほへないけれども、《水浴》の仕事の方向はこの人の従前よりはよいものである。

それと第五室に今年の二部会ではなかなか見栄えあるが、矢、島堅士、奥瀬英三、阿以田治修、鈴木千久馬……いずれも硯質は異なり合ひながら鋒鋳の立つた作家で、それぞれが年々の変転を示すところも面白く、奥瀬君の仕事は殊に今年はすらりとしてゐる。

第六室の《肖像》（能見三次）といったやうな仕事（？）が果して如何扱ふべき境地だらうか。元々がアカデミズムの会とあれば是非かういふものは——更にこの練達を加へたものが——あつてしかるべきものではあるが……と、この第六室のやうな総じて陳列品の画面に気鋒の立たないところで見ると、一番端つこの小柄な《春》（武田一郎）がいかどの好品に見えるやうである。

要之、旧帝展風の、製造絵画ともいふべき仕事は、それがアカデミズムよりも何よりも面白くなく、観者の頭加減もそれが一番掻き乱す適役のやうである。

『報知新聞』 昭和十年十月二十五日

二部会展を見る (3)

有名作家から入選作家へ

木村莊八

小磯良平(第十二室、第二三三、二三四)は、田邊至が旧官學派を代表するならば、これは新官學派を総代する近頃のマークスマンであるが、この人の仕事は、一応は觀者を「小磯」の世界へ連れて行く魔力を持つてゐる。今年の出品画では《日本髪的女》の方が面白いやうだ。——しかし一応は小磯世界へ人を曳入れても、そのまま長く人をそこに止どめておく魅力のないのは、これは小磯良平にその力がないのではなく、アカデミズム自体にそれが無いのだから、止むを得ない。

第八室の《サーカスの楽屋の裏》(新保兵次郎)は、第十三室の《海岸にて》(今村俊夫)、第十四の《小憩》(鈴木貫司)、第十五室の《花屋》(角野判次郎)等と共に——いづれも効果のよいものではないが——その大童の大作振りを奨励されてよいだろう。

第九室の、向う右に田邊・金山が懸かつて、それと鍵の手になった左に、牧野虎雄《朝顔》の懸かる壁面は、第二部会の互いに質のよい極右極左を見せる標本室として面白いが、田邊至の油絵に彩描されてゐる緑葉は、視覚芸術ともいふべき、頭から足の先きまで常識的な官學派基範によるもので、一方、牧野虎雄の画面に賦彩された同じ緑葉は一切そのアカデミズムを排した、官學派ともいふべき、その「形」よりはその「生きる」ことを念

とした仕事である。相對照して、芝居の台詞にある「あれも一生、これも一生」といったところであるが、所詮鑄掛松の役どころは《朝顔》役者のニンにあるのだろう。

第九室の辻永(第一六七、一六八)は静かな仕事振りだし、第十室の佐竹徳次郎《鯉》は、少々画面膨大に過ぎるが、仕事の方向はわかるものだ。

以上はざつと有名画家を目あてに拾ったが、次に入選画から拾って、この書きものを擱筆することにしよう。

僕は前後を通じて皆賞めてゐるのである。少くとも賞めることの出来る作品を拾つてこの文の筋を立てようとした。それ以外の余計な口を利用しても始まらぬと、初めから考へてゐるものであるが、実は僕の紙背の一つの心持をいへば、僕のかう見る二部会が果してその会の標的に当たるなら？これは立派な一会だと思ふし、また、画会の仁義に事を欠くまいと思つてゐるのである。

この文面で見ると二部会には良い作品が並んでゐるやうに見えるだらう。さう読めれば、筆者は本望であるが、勘定して見ると、僕は五十五枚ばかりの作品についてここに述べた。二部会は全部で三百七十八枚の作品を陳列してゐるのである。

勿論右の「五十五枚」は、当座この書きものの帳尻を上げたに過ぎないのみ。これだけがいいもので他の三百二十三枚はいけなないものだ、などといふ気は毛頭無いし、入選画にかけては遺漏があることだらうが——。